

# 米兵のピアノで 歌った先生たち



敗戦直後、米兵が奏でるピアノに合わせて歌った古畑絢子さん(左)と、絵本を出版した博子さん

## 松本の元教員、母から体験聞き取り

松本市波田の元中学校教員古畑博子さん(62)は、小学校教員だった母絢子さん(87)の戦時中の体験を基に、絵本「ピアノリストの兵隊さん」(郷土出版社)を出版した。1945(昭和20)年の終戦直後、中野市の平岡国民学校(現平岡小学校)が舞台。絢子さんから教職員は学校にやってきたある米兵が奏でるピアノに合わせて歌った。人を敵と味方に隔てた戦争と、憎しみを超える音楽の力を伝えたいと、母子が思いを重ねた。

## 「憎しみ超える音楽の力」

絢子さんは44年に新任教員として同校に赴任。45年3月、旧陸軍は松代大本営地下壕(長野市松代町)の砲弾庫として、同校近くに十三崖地下壕を掘削し、武器や弾薬が運び込まれていった。敗戦後は、それまで「鬼畜米英」と呼んでいた米兵がやって来た。同校を宿舎にして地下壕から武器を運び出し、一部は絢子さんたちが訓練で振るったなぎなたや竹やりと一緒に燃やした。そのころ絢子さんは、放課後になると工作室のグラウンド

ピアノに向かって練習していた。9月のある日、背の高い米兵が工作室へ。何をされるのか怖かったというが、ピアノで静かにショパンの夜想曲を弾いた。いつか弾きたいと、絢子さんが戦時中からひそかに練習していた曲だった。その米兵は毎日のようにやってきて「ケンタッキーの家」などの米国の曲や欧州の民謡を弾いた。日本の「荒城の月」も、楽譜を渡すとすぐに演奏。他の教職員や米兵も集まるようになり、声やハミングでピアノに合わせた。博子さんは「母が元氣なうちに」と聞き取りを重ね、絢子さんと平岡小を訪ねて原稿を執筆。「郷土の本当の話として、子どもからお年寄りまで絵本を読んでほしい」と話している。絵は松本市和田の野中秀司さんが描いた。1680円。9月1日午後1時半から、松本市和田の市窪田空穂記念館で出版記念会がある。

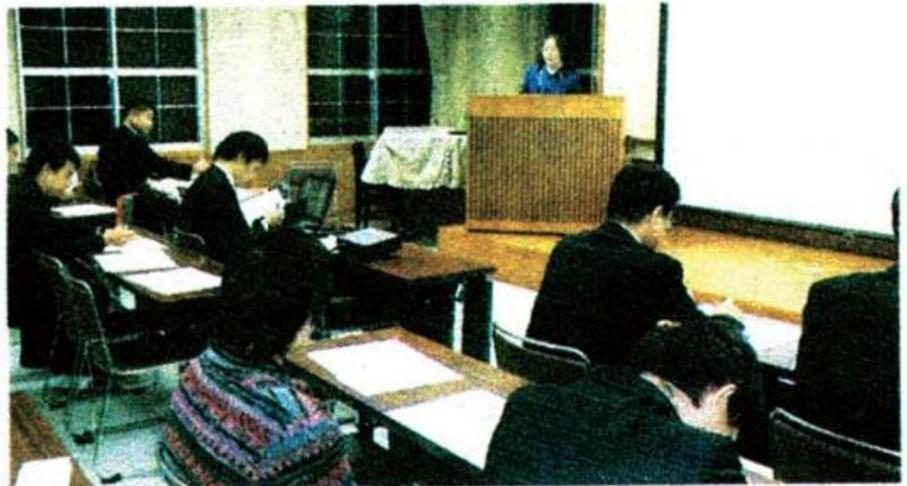
## 戦争と平和を考える

豊科で  
学習会

県教職員組合安曇野支部（原田邦彦執行委員長）は4日、安曇野市豊科の南安曇教育文化会館で「平和を考える学習会」を開いた。戦時中の実話を基にした絵本『ピアノニストの兵隊さん』の作者で元教

諭の古畑博子さん（65）  
松本市波田を講師に招き、市内全17小中学校の教職員約50人が参加して、戦争体験を語り継いでいくことの重要性を確認した。  
古畑さんは、下高井郡平岡村（現中野市）

の国民学校で教師をしていた母・絢子さん（90）の戦中・戦後の実体験を掘り起こして絵本を書いた。「絵本『ピアノニストの兵隊さん』に寄せてある女子野の花」の演題で、原など訴えた。同支部は年1回、平和を考える学習会を開いている。原田執行委員長は「戦争体験者が少なくなる中、教師である私たちが子供たちの心に平和の種をまいていかなければならないと、あらためて責任を感じた」と話していた。（萩原真一）



古畑さんを講師に招いて開かれた、平和を考える学習会

# 記憶をつなぐ

～20代記者が聞いた戦争

女性たち ②

## 終戦時に教員学校一変に衝撃 古畑絢子さん（松本市波田）



「娘が私の体験を絵本にしてくれたことが本当にうれしい」。しみじみと語る古畑さん

教員になるための勉強をしていた学生時代、一番大事なことは子どもに何を教えないことだと言われた。戦後、手のひらを返したように軍国教育が否定された。「これまで教えてきたことは何だったのか」。太平洋戦争末期から戦後にかけて国民学校で教員を務めた松本市波田の古畑絢子さん(88)は当時、大きなショックを受けたという。

群馬県高崎市で生まれ、父親の仕事の都合で軽井沢町や上田市と移り、小学校入学時に松本市へ。1944(昭和19)年に松本女子師範学校(現信大)を卒業後、下高井郡平岡国民学校(現中野市平岡小学校)に赴任。5年生の担任になった。

北信濃は雪深かった。教室のストーブをたく石油も石炭もなく、3畳ほど離れた製材所まで子どもたちと廃材をもらいに行った。長い木材は引きずり、アリの行列のように何度も往復。まきにするためにのこぎりで切る子どもたちの指には血がにじんだ。

夏は勤労奉仕で炎天下、ホップ摘みをした。子どもたちは決して愚痴をこぼさなかった。「欲しがりません勝つまでは」「ぜいたくは敵だ」。そう教えてもいた。

食料は配給制で、コメは少なく、学校にはジャガイモやサツマイモを混ぜたおにぎりを持参した。ただ、毎日、教室の教員机の引き出しに白米のおにぎりが入っていた。児童の誰かの気遣いとみられ、優しさに胸が熱くなった。

終戦は夏休みで帰省した松本

## 米兵と音楽交流 救いに

市の実家で迎えた。翌朝、鉄道で学校へ。教員は集合したものの、どうしていいかわからなかった。

突然、男性教員が教室に立てこもり、ゴーゴーと泣きだした。熱心に親を説得し、教え子を青少年義勇軍として旧満州(中国東北部)へ送り出した教員だった。「責任の重さを感じたのだろうか」。その泣き声は今も古畑さんの耳に残る。

休み明けの学校は一変した。毎日の持ち物検査で、戦争を連想させるものがないかチェックした。筆箱に飛行機の絵が書いてあると、隠すように指示した。別の女性教員が授業に遅れそうになって走ると、駆け足は軍隊調だと厳しく叱責された。しばらくして、校舎が米国の進駐軍の宿舎となった。授業中

の教室や職員室にも米兵がずかずか入ってきた。校庭には教科書やレコード、なぎなたや銃剣術の道具などが高く積み重ね、重油をかけて燃やされた。黒煙

が入ってくる教室ですすり泣く子もいた。ある日、グラランドピアノがある教室に、米兵が入ってきた。思わず身構えたが弾きたがって

### 聞き終えて

学校教育が戦中と戦後で一変したことは分かっていたが、その最中の教員の葛藤に思いをはせたことはなかった。心の中で疑問を持ちながらも子どもたちに軍国教育を強いてきただけに、急な民主主義への転換が古畑さんに与えた戸惑いは相当なものだった。証言からは戦時下の苦しい状況に子どもが耐え忍んでいた様子も分かった。ただ、「鬼畜米英」と呼び、恐れてきた米兵と音楽を通じた交流が芽生えたエピソードには、ほっとする気持ちになった。戦争をしているのは「同じ人間同士」だと思いつくせられた。(後藤 裕香)



古畑さん(前列中央)が担任だった下高井郡平岡国民学校の学級

戦中・戦後の学校教育 1941(昭和16)年の国民学校令により、旧制の小学校から初等科6年と高等科2年の国民学校に改組。軍国主義を前面に出した教育が行われた。戦後、連合国軍総司令部(GHQ)の占領政策で進められた日本の民主化で教育改革も行われ、新憲法施行の47年に公布された教育基本法によって、現在の六・三・三・四制の学制が成立した。

大正十三年生まれの私は、若い時代を、すべて戦の中で過ごした、といっても過言ではありません。物心ついて満州事変、日支事変、そして太平洋戦争と、戦火は広がり、第二次世界大戦へと拡大し、泥沼へ深くはまりこんでいきました。

松本市の小学校に在学中のころから、授業を休んでは日の丸の小旗をふって「万歳、万歳」と出征兵士を見送り、また戦没者の遺骨をお迎えするために街々に並んだものでした。

十九年三月に卒業して、下高井郡平岡国民学校に奉職したころは、戦争も一段と熾(し)烈を極め、本土決戦、神風特攻隊、学徒出陣、学童疎開と、個性も、自由も、

人格も、すべて抹殺され、ただ軍国主義教育の中で心安らかな日はありませんでした。今度は勤労奉仕、戦時教

練、馬事訓練と、学業の時間を割いては一生懸命に働いた。私は五年女子組の担任で、毎日でした。山本五十六元帥の戦死、アッツ島の玉砕と悲痛な空気のみなぎる折、尊敬する恩師の応召に直面するに至って、悲しく戦をのろつて泣いたものでした。

私は五年女子組の担任で、高学年ということで、よく勤

# 私の歩んだ昭和

古畑 絢子(62歳)

## 終戦...教師として悩んだ日々

### 大道踏み違えぬ教育を



たのでした。夏の炎天下で終日、道路の両端を掘り起こし、日ホップを積み、また繊維をとるため鎌を手にあかそを採

た。道路の両端を掘り起こし、日ホップを積み、また繊維をとるため鎌を手にあかそを採

材所へ製材くずを運びに行き、長い板切れを引きずりながら運ぶ姿は、けなげで、い

軍として送り出した教師としての責任の重大さを、痛切に感じたからでしょう。教師として自信を失い、良心の呵責(かしゃく)にさいなまれ、これからどうしたらよいか? と悩む生活が、この時から始まったのでした。失ったものの、あまりの大きさに、また教えてきた事が真実でなかったことに。

ある時は戦をのろい、指導者を疑った事もないと言え、うそになります。そんな気持ちを打ち消し、誠心誠意、純粋に身を置いて国策に沿ってきたのでした。兄は南方に、弟は学徒出陣でいき、今の主人も支那にいつてしま

い、身の回りの男の人は一人二人といなくなつて、いつ婦人のか、そのあてもない。幼い子供まで聖戦の名の下に戦の渦中に巻き込んでしまったことは、時代とは言え侮

いて余りあるものでした。(東筑摩郡波田町・主婦)

り、藤ヅルを求めて山野を歩きました。肩に食い込む重荷を我慢しながら学校まで運び込み、ある時は手を豆だらけにして桑の皮むきもしまし

く、子供らは三、も離れた製

北国の冬は雪が深く、長いストロブにたく石炭もな

き、子供らは三、も離れた製

## 口差点

72年前の12月8日、国民は突如、真珠湾奇襲攻撃による開戦を知らされました。3年後、松代大本営を守るための武器や弾薬を貯蔵する地下壕が中野市の十三崖に掘られました。戦争絵本『ピアニストの兵隊さん』の舞台となる平岡国民学校が陸軍作業本部と兵舎になりまし

た。3年後、松代大本営を守るための武器や弾薬を貯蔵する地下壕が中野市の十三崖に掘られました。戦争絵本『ピアニストの兵隊さん』の舞台となる平岡国民学校が陸軍作業本部と兵舎になりまし

### 大本営を守る武器

補地の海岸で、爆雷を身につけ、自爆攻撃すべき立場でした。そのころ、召集されてくる兵隊には銃も武器もありませんでした。しかし、この絵本で、大本営は大量の武器弾薬を地下壕に埋蔵、前線の兵は見殺しに

65歳

(松本市波田、古畑博子)

# 人の心をつなぐ物語



## 高綱中生(松本)が劇上演

太平洋戦争中から戦後にかけて教師だった女性と、米軍兵士のピアノを通じた交流を描いた絵本「ピアニストの兵隊さん」を、松本市高綱中学校の一年生たちが劇にした。二十七日に同校であった文化祭で全員で上演し「戦争を引き起こす差別や憎しみのない世界をつくりたい」とのメッセージを訴えた。

(中津芳子)

### 絵本「ピアニストの兵隊さん」

#### 平和の大切さ訴える

絵本の作者は、同市波田の古畑博子さん(六八)。母絢子さん(八七)の実話を基に、二〇一一年に出版した。絵本を読んだ高綱中の曾山めくくった。

正子教諭が、平和教育に活用しようと生徒による劇を提案。曾山教諭が脚本を書いた。

「ピアニストの兵隊さん」は、師範学校を卒業したばかりの絢子が赴任先の国民学校でピアノを弾く。すると、進駐軍の米兵がやってくる。ピアノを弾き、お互いの国の歌を

歌い合う。かつての敵味方関係なく、ピアノが人の心をつないでいくという物語だ。

絢子や米兵を生徒が演じ、ナレーションも加えて当時の様子を再現。最後は、全員が将来の夢を書いた画用紙を高く掲げ、「戦争は人が起こすもの。二度と悲劇を繰り返さないよう、私たちは学び、伝えていきたい」と締めくくった。

「ピアニストの兵隊さん」を全員で演じる高綱中一年生。松本市で

「ピアニストの兵隊さん」を全員で演じる高綱中一年生。松本市で

## みすず野

2年前の夏、本欄でも紹介させていた絵本『ピアニストの兵隊さん』（郷土出版社の「語り継ぐ戦争絵本シリーズ8」）の物語が、松本市高綱中学校の文化祭で、1年生全員（100人）による舞台劇として発表される◆これは、大きな実りをもたらしそう。89歳になられる松本市波田の古畑絢子さんが、新卒赴任した下高井郡平岡村（現中野市）の小学校で、敗戦直後、やって来た進駐軍に校舎半分を占拠されたある日、実際に体験したエピソードを、娘の博子さんが聞き取り、現地も訪れ、絵本に著した◆高綱中の曾山正子教諭が読んで感動し、平和学習に役立てようと、舞台劇を思いついて脚本を書く。絢子さん、博子さん、絵を担当した野中秀司さんに取材するなか、生徒たちは役柄、合唱、音響、ナレーションなどに分かれ、練習を重ねてきた。音楽に秘められた「愛と平和」の物語が、学校祭の大舞台で花開くことに◆母から娘へ、そして地元の中学生たちへ。戦争の時代は遠い過去に押し流され、どう呼び戻し、伝えるかは体験者や大人にとって重い課題だ。こうした取り組みは意義深い。本日午前、一般公開される。

2013. 9. 27

松本・高綱中1年生100人

# 平和への思い 伝える舞台

## 「ピアニストの兵隊さん」 27日 文化祭で発表



歌や芝居の練習をする1年生(13日)

松本市立高綱中1年生100人は、同市波田の古畑博子さん(64)が2011年に書いた絵本「ピアニストの兵隊さん」(郷土出版社)を題材にしたステージ発表の準備を進めている。27日、学校文化祭「若鷹祭」の中で発表。絵本に託された平和へのメッセージが、地元中学生の手によって、さらに多くの人に伝えられようとしている。(松尾尚久)

### 戦中・戦後の教師の体験 古畑さん 作の絵本もとに

同作は、師範学校を「絢子」が、第2次世界卒業したばかりの教師 界大戦の戦中、戦後、

赴任先の小学校で過ごした2年間の物語。古畑さんの母絢子さん(89)の実体験が描かれている。

戦後、校舎が進駐軍の宿舎になったところから、物語のクライマックス。

絢子が音楽室にいると、一人の米兵がやってきて、シヨパンの「ノクターン」を弾き始める。以降、米兵が毎日音楽室でピアノを弾くようになると、ピアノの周りには次第に米兵と教師が集まり始め、アメリカ、日本、ドイツなどの歌を、英語や日本語などで一緒に歌うようになる。

この物語に心を打たれた同校1学年の副担

### 古畑絢子さん(右奥)を取材する1学年担当教諭たち(11日)



たったり、劇中音楽「ノクターン」の演奏を地元ピアニスト白井文代さんが担当するなど、地域ぐるみで生徒を支える。

推進委員を務める大和花琳さん(13)は「かつて、怖くて悲しい時代があった

任曾山正子教諭は、平和学習の教材に活用しようとして、夏休み明けに生徒に提案。原作を元に自ら台本を執筆した。

生徒たちは、制作を指揮する推進委員をはじめ、ナレーション、役者、合唱、音響、照明などに分かれて、急ピッチで舞台制作中。絢子さんや古畑さん、絵本の絵を担当した画家野中秀司さん(同市和田)へのビデオ取材も生徒と教師が手分けして行った。

松本大の学生2人がナレーション指導に当

「本に込めた思いが中学生の心に届くこと、そして、彼らの手によってより多くの人に伝わること、感動する。本を出版したとき以上にうれしい」と話した。

# 回差点

『ピアノニストの兵隊さん』の本に出ている先生は私の父ではないか」との問い合わせが郷土出版社にあり、文を書いた私に連絡がきました。語り継ぐ戦争絵本シリーズの8冊目に、昭和19年、現在の中野市にあ

った平岡国民学校の新任教師となった母の、2年間の戦争体験をつづりました

ります。国策を信じて親を説得し、14歳、15歳の教子を満蒙開拓青少年義勇軍に送ってきた先生です。敗戦直後のこと、M先生は教室にこもって号泣し、子供たちの名を呼び続けま

った平岡国民学校の新任教師となった母の、2年間の戦争体験をつづりました。その光景を目の当たりにした母は今も、あの子のM先生の声が耳に焼きついてるといいます。

## 戦争絵本その後

いません」とのこと。早速、M先生と生徒61人の写真を送りました。どの生徒が義勇軍に行ったのか知る由もありませんが、下高井郡の義勇軍227人と満蒙開拓団高社郷631人がソ

連侵攻後にたどった悲劇を、私は本の「あとがき」に書かずにはいられません。満州（現在の中国東北部）の野を逃避行の末、昭和20年8月25日、日本と故郷を思い、子供を含む600人余りが集団自決

したのです。長野県は全国一、桁違いに多くの開拓団を満州に送りました。私の住む波田は義勇軍を送り出す興亜教育の先駆けとなって、昭和14年には県内一の31人を送出したことを知りました。どれほどの人々がM先生のよ

うな涙を流し、語れない重荷を負ってきたのでしょうか。その荷を引き継ぐのは私たちです。とりわけ教育の影響と責任の大きさを思うのです。  
（松本市波田、古畑博子、64歳）

## 講演会履歴一覧

---

☆平成 26 年 2014 年 11 月 4 日 (火曜日) 17:30

長野県教職員組合安曇野支部 講演会

テーマ: 絵本「ピアニストの兵隊さん」に寄せて

～語り続けたい ある女教師の戦争体験 と 長崎「原子野の花」～

講師: 古畑博子

☆平成 25 年 2013 年 5 月 24 日 (金曜日) 10:00

長野県退職女性教職員の会 定例総会 講演会

テーマ: 「ピアニストの兵隊さん」

～語り続けたい 母の戦争体験～

講師: 古畑博子

☆平成 24 年 2012 年 12 月

松商学園高校放送部 製作

長野県高等学校放送コンテスト オーディオピクチャー部門 (優秀賞)

テーマ: 以 “音” 伝心～奇跡の夜想曲ノクターン～

絵本「ピアニストの兵隊さん」を通じて、音楽の持つ無限な可能性と素晴らしさを伝えようと制作したドキュメント作品